

# はくぼく

No.236 2016-11-25(金)

責任者 三浦真吾

事務局 吉田朝夫

釧路市美原3丁目57-4 TEL 36-7426

## II 訃 報 II

### 大 嶽 正 道 さん

去る一〇月三十一日。長いこと釧路市昭和町の老健施設「歩・歩」に入所していた大嶽正道さんが、急遽入院され、一ヶ月程治療を受けていましたが、様態が急変し、一〇月三十一日。逝去されました。通夜は十一月二日、白糠の生家である瑞英寺に於いて行なわれ、参列してきました。同寺の四男で、甥のご住職の読経で通夜が行なわれました。長い間、故郷の白糠を離れて居たせいか、参列者も少なく家族・親族を含め、三〇人程度の参列者でした。大嶽さんは、現職時は、民教の「作文の会」に所属し、作文教育に貢献して来ました。組合活動も意欲的に活動していました。退職後は、奥さんを亡くし、一人暮らしをつづけましたが、釧路の施設に入居してからも、詩集を発行したり、いろんな活動に参加していました。八十二才という年齢でしたが、まだまだ生きて欲しかった人でした。

### 高 嶋 好 夫 さん

去る十一月十五日、入院加療中でしたが様態が急変し、逝去されました。享年八十四歳でした。若草町のベルコ会館で、「偲ぶ会」が催されました。「偲ぶ会」とのこととで葬儀ではなく、親族、知人の集いとなり、少人数の集まりでした。住職による読経もなく、位牌も戒名でなく、「故高嶋好夫の霊」と記名されただけの位牌でした。先生は皆さんご存知のように、標茶町の名誉町長の高嶋町長のご子息で、標茶中学校勤務が長く、殆んど標茶町内の学校勤務が長かったと記憶しています。歴教協の「民教」に所属し、又「集団づくり」の実践にも意欲的に関わり、特に、上茶安別小中学校の生活指導の実践には当時、研究会では話題となったのが、今でも記憶に残っています。惜しい人達が亡くなって行きます。ご冥福を祈ります。

## 大嶽正道さん逝く 涙の別れ

野 瀬 義 昭さん

大嶽さんとは、退職後深い親交があった。民主文学界の仲間として、作品を創作したり、合評したりして楽しんだ。奥さんに先立たれて間もなく体調を崩し、老健施設「歩歩」に入所した。私はよく訪れ、雑談に華を咲かせていた。現職時代の嶽さんは、「教え子を再び戦場に送らない」の旗印のもとに、いつも先頭に立っていた。

住所が遠くなり、こころばらく顔を出さなかった私は、ひと月ほど前に嶽さんのものを訪れた。歩けなくなった嶽さんは、車椅子に座り、職員に押されて通りかかった。私は近寄って腰をかがめ、「野瀬だが、わかるかなあ」と、優しく声をかけた。少々間をおいてコクンと会釈したが、声も笑顔もなかった。そのまま食堂に姿を消した。どうやら会話ができないようだった。その後姿に頭を下げたら、はらはらと頬に涙が流れた。

あんなにおしゃべり仲間の嶽正道さん、私より三歳も若かったのに先に逝っちゃったね。さようなら。ご冥福を祈ります。

## 一〇月パークの結果報告

過日、一〇月二十四日、今年最後のパークゴルフを釧路町遠矢パークゴルフ場でおこないました。七名の参加者でした。結果は次の通りです。

- ・優勝 大西 雄さん 107 打
- ・二位 三浦 信一さん 110 打
- ・三位 坂井 純吾さん 116 打
- その他の参加者 ・千葉・古田・伊藤・八木(各) 以上七名

## 交流囲碁・麻雀大会の結果報告

十一月十九日(土) 星が浦教育会館を会場に、恒例の年金者組合と共催の「交流囲碁・麻雀大会」を開催しました。例年なら、当日ギリギリまで人集めにロコミ電話かけで苦労しましたが、今回は、その心配もなく、麻雀の希望が増えて、囲碁に回ってもらおうといううれしい大会でした。麻雀二卓、囲碁四面という参加人数でした。参加された皆さんご苦労様でした。

### II 囲碁の部 II

### II 麻雀の部 II

- ・優勝 釜 范 健さん・優勝 伊藤 清隆さん
- ・二位 釜 范 尚さん・二位 大西 勝雄さん
- ・三位 橋本 政夫さん・三位 坂井 純吾さん

その他の参加者 ・ 囲碁・原・古田・有田・田中・三浦・

麻雀・澤谷・桜井・青山・川村

## 小森陽一氏講演 ついよ明日です

釧路九条の会主催の「小森陽一氏講演」(二十六日)が、いよいよあすになりました。この通信が明日以降到着で、間に合いませんが、主催者の一員として、一応連絡いたします。

どうぞロコミで沢山の参加を期待しております。

# 『私の歴史』その二

戸澤 貴志子

二、四谷内藤町、小学校の頃

昭和のはじめ、父は弁護士事務所を四谷内藤町に移し、家族もそこに移った。父は長野県伊那の庄屋の生まれで、祖父の代から本居宣長、平田篤胤の国学に傾倒し、文人墨客との交友があった。その思想の根本は「古神道」で、尊王排外主義に徹底していた。十年越しの研究を出版する事になり、書生や女中が忙しく働いていた。著書の背表紙には「赤化思想の根源」とあり、菊版クロス製七百余ページの大著であった。

時の有力者菅原嘉道（枢密院議長治安維持法改悪当時の司法大臣）、鈴木喜三郎（政友会総裁内務大臣）らの後援を得て華々しく発表した。しかし、不景気の最中で右翼の本も売れず、弁護士の仕事も振るわず家計は次第に不如意になる。

父は非常な勉強家で、各国語に通じ、特にロシア語、イスラム語を研究した。ユダヤの野望云々とその論証をあげ、ヒトラーを支持した。皇国の道、大和民族の優秀性を説き、国粹主義団体の理論的指導にも参画した。或る日、新聞全紙一面に大きな顔があつて、父は「いよいよよやつたか」と珍しく興奮していた。それは松岡洋右の大寫しの顔で、国際連盟を脱退したニュースだった。朝日新聞でさえ、国連脱退をにぎにぎしく報ずる世相であつた。朝日新聞と、はつきり覚えてゐるのは、当時、連載小説が吉川英治の宮本武蔵、挿絵が石井鶴三で、私はその絵が好きで毎日大人が見た後、ゆっくり絵も文も楽しんでた。突然大寫しの顔を見て驚いたのを覚えてゐる。小学生中学年の頃である。肉弾三勇士の偉業を何度も講堂で聞かされ、世の中は戦争への道を進んでいた。従つて、左翼政党への弾圧は激しく、この年に小林多喜二が惨殺されている。私は信濃町の慶応病院西隣りにある四谷区立第六小学校に通つた。新設して間もない頃で、校長先生の教育方針を慕つて進歩的な若い先生が多かつた。任命級長でなく、選挙でクラス代表を決め、名前も「週番」だった。代表が集まつて会議をし、規律を決めて運営した。鉄筋コンクリート四階建てで、三・四階は高等科や実家女学校が入つていた。デパートにある様なチームが通つていて、屋上の脇には太い短い煙突があつた。隣の学校は火鉢とダルマストロブだった。4時間目になると、チームの上に並べた弁当からおかずの香りがただよつてきた。屋上に出ると、南側眼下に鉄道をはさんだ神宮プール（オリンピック選手の前畑秀子選手が練習しに来ていた）外苑、西側は新宿御苑、東左手に赤坂離宮の森、その先にいつも足場を組んだ建設中の国会議事堂が、正ちゃん帽の様な屋根を青空の中に白く浮き立たせていたのを覚えてゐる。線路に沿つて御苑の方に行く道は淋しく、人通りが少なかつた。曲がり角の鉄道の柵の所に「チョット待て」と言う立札が立つていた。飛び込み自殺がはやってきたからで、私達は気味が悪かつたので、そこを走つて通つた。不景気で仕事がなく、麻薬を注射してゴロゴロしている人もいて、その道は一人では歩かない事にしてゐた。東北地方の凶作が不景気に輪をかけ、農村の女性が身売りする話も度々あつた。砂場からちよつと入つた木立の中に「なんじやもんじやの木」と名札の付いた大きな木があつた。そのわきに「樺太北緯五十度国境の礎石」と書いた将棋の駒の形をした高さ六十センチ位の石碑があつた。樺太にあるものと同じものだという。夕食後、母や兄達と犬を連れて外苑に散歩に行つた。父が猟に連れて行くセッターとか、ポインターとかいう利口な犬だった。長い棒を持った黒づくめの、トラン

プのジョーカーみたいな人が、ひよいひよいと走つてガス灯をつけていく。広い外苑の道を青山の方へ風のように軽やかに、やがて姿は紫色の夕闇にまみれて見えなくなるが、ガス等の灯かりがポツ、ポツとついていくのが影絵のように美しく、今もその光景が家族の思い出と共に眼に浮ぶ。(つづく)

## ◆『尺別事件』◆ その一

井川 謙一

「このようにして、以前から「はくばく」掲載の依頼がありました。先日原稿が届きましたので、今回から掲載することにしました。その昔、言葉としては聞いていましたが、内容については熟知していませんでした。井川さんの意欲的な寄稿です。半世紀前の真実を読み取っていただければ幸いです。

### 第一章 尺別事件発生

一九六一年十一月六日、この尺別炭鉱で奇怪な事件が起きた。「生産阻害者排除」が会社から組合に申し入れられた。解雇指名を受けた者が「ベルトコンベア、チェーンコンベア、軌道に障害を加えて妨害する」などを含む破壊活動の指令を回覧していた。証拠として、組合書記長泉信夫の筆跡という指令書と筆跡鑑定書が添えられていた。

泉が会社から団交の申し入れを知つたのは、政府の石炭政策に反対する炭労の政転闘争の全国オルグから戻つてのことだった。事件はこうして幕を開く。会社は「全山の従業員に訴える、怖るべき生産妨害の策謀！会社は一味全員の排除を決意」と、活版刷りのビラをばら撒いた。会社は団交はどうでもよく、泉を含む生産妨害者九名の首切りを認めさせ、組合からの事実調査を待たせただけだった。これを皮切りに道路と炭住街の入口、橋の上、貯炭場の陰など、アリの抜け出る隙もない見張りの網が張られ、要所々々を固めた。労務の詰所からは労務の監視、こうして山は異常な雰囲気包まれていた。

#### 《組合の事件に対する認識の甘々》

組合執行部の対応は、立ち上がりから、会社に遅れを取つていた。執行部は事態の真相に確信を欠き、右派幹部らは、始めから該当者たちに対し、「生産の妨害を企てた許せない者たち」と、不信感すら持つていた。一方会社は該当者の行動を見張り、尾行を続け、家族の挙動を労務が詰所から監視していた。泉は心外でならなかつた。会社の手放しの攻勢が山中を震がいさせてるのに、組合の全山放送は、会社に抗議し、組合員を落ち着かせるような厳正な釈明もない。予断を持つて該当者たちに臨まないような配慮が伝えられるはずだったが、執行委員会の決定を教宣部長が文書にしてきたのを見れば、事態の説明が会社の言い分の丸写しになっていて、これでは受け取る方のインシしようが配慮とは全く違つてしまふ。実のところ、これは執行部が事態の真相に確信を欠いてきたからで、右派幹部らは初めから該当者たちに対し、「あいづらは何をやるかわかつたもんじやない」という敵意から出た不信感もなかつたとは言えず、そのための会社の先制攻撃に押しまわされることになってしまった。《いや、それどころか、会社に内通している者ささえるのだ》泉は屈辱と孤立感に襲われていた。

・各種署名用紙は、今月末に集約します。  
ぜひこの間に各戸へお送り下さい。